所報

愛知東邦大学地域創造研究所

2016.3 NO.21

凝視したい土の魅力 ―地力から知力へ

地域創造研究所 所長
山極完治

2015年のノーベル医学生理学賞は、他のどこでもない静岡県伊東市で採取された土のなかにある微生物の発見から始まった。寄生虫を駆除できる「アベルメクチン」をもとにイベルメクチンが開発され、失明に至る風土病に効果があるだけでなく、犬のフィラリア症の特効薬にもなった。犬の寿命を10年伸ばしたとも言われている。大村先生は各地の土を採取する人、世のためになることをしたいとする実直な人柄を映し出す先生の研究業績は身近でわかりやすい。

土は宝庫。それは、元来、作物を生育させうる能力を有している。土壌の物理性は、光と水と温度などが適当なバランスを保ち、特定の作物を生産する養分を供給するところにある。肥沃な土壌にある有機物やミネラルが吸い上げられた作物のおかげで私たちの心身がつくられる。宝庫は「多くの資源や産物を産出する土地」そのものである。

足元にある土は、実に多様性があり、繊細で美しい。このことを伝える芸術家がいる。栗田宏一さんも土を採取する人である。沖縄から北海道まで20年間かけて採取された3万を超える土のうち、600種の土を正方形の和紙の上に並べてみせるインスタレーションが信州松代藩の武術道場で披露された。土は多彩な色をもち、固有性を有する。このことを思い知らされる。

日本の食に警鐘をならす料理家・辰巳芳子さんは、病床の父のために工夫を凝らして作り続けたスープがある。これは、今では人々を癒す「いのちのスープ」と呼ばれている。それぞれの素材の性質を生かし、食べてもらう人が喜ぶように丁寧に調理する。穀物の自給自足率が4割を切る現状を嘆き、2004年以来、「大豆100粒運動」を続けている。「土を離れて人間の存在はありえないしね。だから土をダメにしちゃうような経済の考え方で、土をダメにしちゃうような政策っていうのは、考えなきゃならないですね。」地産地消、旬産旬消にこだわり続ける農業経済はいのちを守る。この辰巳さんの考えに共感する誠実な志を持つ生産者が全国にいる。日本も捨てたものではない。これらは『天のしずく』というドキュメンタリー映画に結実し、大きな評判となった。

土は地、地は土地や場所を指す。地力（ちりょく）を持つ所以は土の魅力にある。アマゾンの熱帯雨林はがんや難病の特効薬の宝庫とも言う。根っこから自然を育てる地力は、根源にある自ら立つ力をもって地力（じりき）とも表現される。「じりき」を持つ「ちりょく」は、「知力」ともなるに違いない。

2007年4月、愛知東邦大学地域創造研究所は、2002年10月に発足した東邦学園大学地域ビジネス研究所を改称・継承した研究機関である。新年10月には15年目を迎える地域創造研究所は、地の力に始まる発展系の中に「知の拠点」として地歩を築きたいものである。

CONTENTS

01 巻頭言
「凝視したい土の魅力 ―地力から知力へ」山極完治

02 部会報告
「教員と保育士の育成における『サービス・ラーニング』の実践研究部会」 白井克尚
「『下出書店』の実態解明進む」森 靖雄

03 定例研究会報告
「学生の『力』をのばす大学教育」手嶋慎介・大勝志津穂

04 研究会報告
「地域の高齢者に対する健康教室―ふまねっと運動を試みて―」澤田節子

05 講演会・シンポジウム
「多様性を活かす『女性活躍』で企業業績が向上」山極完治

06 秋の公演会
「地球のステージⅣ―果てなき地平線―」宗貞秀紀

07 書籍紹介
地域創造研究所の近著2冊
寄稿
「地域生活に必要な四つの人間関係」宗貞秀紀

08 地域の話題
「すすむ東邦 地域連携事業」小柳津久美子
地域創造研究所 2015年度の主な活動

部会報告

教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究部会

教員と保育士の養成における
「サービス・ラーニング」の
実践研究部会
白井克尚

2014年度に始まった本学教育学部の特色ある教育方法として、名東区内を中心に名古屋市内の小学校・幼稚園・保育所・児童福祉施設などの地域諸機関と連携した「サービス・ラーニング」の実践に取り組んでいる。「サービス・ラーニング」とは、地域諸機関での奉仕活動を通した経験学習のことであり、2015年度からは、地域創造研究所の助成を受け、三年計画で教員と保育士の養成課程における新たな実践の共同研究をおこなっている。全国の大学で学生ボランティアはすでに当たり前であるが、こうした「サービス・ラーニング」を1年次から導入するのは全国的に見ても例が無く、貴重な取り組みであるといえる。

本年度の前期には、学生たちは、『「サービス・ラーニング」ハンドブック』を携えて、名東区内8つの小学校での運動会の手伝いや、児童館の子どもとの交流や活動の補助、小学校子ども会での活動補助、幼稚園での遠足の引率補助などの活動に取り組んだ。さらに本年度からは、近隣の保育園での「地域子育て支援」の活動も開始された。参加した学生の感想の中には、「子どもたちに負けている部分や学ぶべきところがたくさんあった」「先生たちは見えないところで子どもたちより走っている」というように、ありのままの子どもたち、教師、保育士の姿を観察して、キャンパス内での学びに生かそうとする態度が見られた。後期には、名東区内小学校での作品展や学芸会、授業参観などの行事への参加、幼稚園の運動会補助などの活動が行われた。参加報告会は、前期、後期の2回に分けて開催され、発表する側も聞く側も、ともに刺激になった様子であった。初等教育コースと幼児教育コースの学生が一緒に活動をすることで学生同士の交流も深まり、活動中、昨年度の経験者2年生が、1年生のコーチ役となったことも、有意義な成果であった。

今後も本部会では、「サービス・ラーニング」は「プレ教育（保育）実習」に相当するという位置づけのもと、積極的な実践研究を深めていきたい。

部会報告

「下出書店」の実態解明進む

中部産業史研究部会
森 靖雄

2014−15年度の中部産業史研究部会（以下、中産研）は、東邦学園創設者の一人である下出義雄氏にかかわる研究として、東京・青山に設立された「下出書店」の実態解明に力を入れた。わが国では草創期であった社会科学系の書籍を集中的に発刊したが、間もなく関東大震災で壊滅的打撃を受けて廃業した短命な書店であった。しかし、2年間に50冊を超える新刊書を出版し、廃業後も「社会科学の下出」として知られる存在であった。

その資金が父親の下出民義氏から出ていたことや、出版人が下出義雄氏であったことは判っていたが、当時義雄氏は名古屋紡績の支配人を務め、東京で執筆者を依頼したり印刷所などと折衝したりする時間はなかったと考えられた。では誰がこの書店を取り仕切っていたのか？また、東京大学にも「下出文庫」があるが、どういう収書なのか今どうなっているのか、その解明が14年度の研究課題であった。

経過を省略して結果を要約すると、「下出書店」に関しては、おもに朝井佐智子氏（愛知淑徳大学講師）の精力的な調査によって実務担当者が絞り込まれ、加えて日本社会学会の最初の機関研究誌（月刊）『社会学雑誌』（1924-30）が下出書店から出版されていたことや、発行人が下出隼吉氏であることが明らかになった。「東大の下出文庫」については、寺島雅隆主査と筆者（森）が調査に当たり、東京大学社会学研究室に現存することを確認した。写真はその一部（約1/3）である。

2015年度は昨年度の成果を拡大して「戦間期を中心とした中部産業の研究」のテーマで年度中に成果をまとめる予定であったが、主査の数か月間休職という事態が起き、前期は開店休業状態に追い込まれた。関係者の努力で山極完治研究所長に中産研の主査代行兼務が決まり、2015年10月から月例研究会を再開した。

定例研究会報告

学生の「力」をのばす大学教育

人材育成研究部会
手嶋慎介
大勝志津穂

人材育成研究部会では、2015年6月2日（火）16：30～17：30、L棟4A階　LCホールにおいて、地域創造研究所叢書No.22号刊行記念として、定例研究会報告を行いました。研究会は、叢書No.22号と同じく『学生の「力」をのばす大学教育』と題し、各専門分野における学びと人材育成についての考察、実際の試み事例を紹介しました。

研究部会主査である手嶋が、研究会の皮切りとして本書を紹介、その後の「地域をフィールドとしたゼミ／プロジェクト活動」の展開事例として「東山動植物園」協力による課題解決型学習、NPOとの連携による東邦オリジナルの「寄付型自販機」設置など、その教育効果についての考察、地域・産学連携の取組みを紹介しました。以下には、大勝発表を要約します。

部活動を通じた人材育成

研究報告会では、2つの内容について発表を行いました。ひとつは、運動部活動を通じた人材育成が可能か否かであり、もうひとつは、その人材育成を本学「強化指定クラブ」に適用するために何が必要かを考える内容です。

まず、スポーツ基本法の前文から、「スポーツには人を育てる要素がある」という認識が、一般的であることを確認しました。次に、「人材育成」をどう捉えるかを考えました。多様な捉え方がある中で、スポーツでは「ライフスキル」との関わりについて、これまで多くの研究が行われてきたことを紹介しました。特にアメリカでは、大学スポーツ選手が直面する暴力や飲酒、ドラッグなどの問題解決策、卒業後の進路、現役選手引退後のセカンドキャリアの問題など、様々な問題への対処法としてライフスキル獲得の試みがなされていることを紹介しました。一方日本では、スポーツそのものに教育的指導がなされているとの認識があり、わざわざスポーツにおける教育の必要性、重要性が唱えられてこなかった現状があることを伝えました。しかし、近年、子どもの自己管理能力や対人関係、コミュニケーション能力の未熟さ、また、スポーツ選手やスポーツ団体の不祥事、さらに大学卒業後のプロ選手へのキャリア選択の広がりなど、多様な場面でスポーツを通じた教育の必要性が唱えられ、スポーツを通じた人材育成への期待が高まってきたことを紹介しました。

スポーツを通じた人材育成で重要なことは、選手がスポーツを通じて獲得したライフスキルを、スポーツ場面だけでなく、社会生活に般化あるいは変換できるか否かです。スポーツ場面では心理的スキル（意欲や安定、集中や自信、協調性など）や社会的スキル（コミュニケーション能力やリーダーシップ能力など）を獲得します。しかしながら、多くの選手は、スポーツ場面と社会生活を別のものだと考えているため、スポーツ場面で獲得したスキルを社会生活に変換する術を身につけていません。彼らがスポーツを通じて得たスキルを社会生活に般化させるためには、サポートが必要となります。まずは、支援体制を構築し、目標を設定し共有することです。さらに、スポーツ以外の社会経験をさせることも重要なポイントになると言われています。

本学強化指定クラブについては、大学の理念に沿った運動部活動における行動規範の作成、大学のAP、CP、DPに沿った選手受け入れ、人材育成、人材輩出を明確にすることが必要です。また、主体的な行動を促すとともに、まずは彼らが得意とするスポーツを手段として、社会と関わる機会を設けることです。具体的には、地域住民へのスポーツ教室やスポーツイベントの開催など考えられます。本学の強化指定クラブには、この部分が少ないと感じています。同質集団の中でしか過ごす機会がないため、考え方や視野が狭くなっています。地域社会に出ることによって、自らの属性と異なる多くの人と触れ合い、客観的に自分自身とスポーツとの関係を捉えることができるようになるでしょう。そうすることにより、自分の置かれている立場や存在を理解することができるようになります。サポートする側は、学生が主体的に考え行動できるように、焦らずじっくり指導することが求められます。スポーツで培ったスキルを社会に応用できることに気づかせられれば、彼らも成長することができ、社会に必要とされる人材に育つと考えています。

研究会報告

地域の高齢者に対する健康教室
―ふまねっと運動を試みて―

地域の健康づくり研究部会
澤田節子

本研究部会は、地域住民に対する健康づくり運動の推進を目標としている。健康づくり運動のうち高齢者に対しては、介護予防、転倒予防のための身体活動・運動が重要であることは周知のとおりである。一般的には、筋力あるいは全身持久力などの向上を目指したトレーニングが多く実施されているが、近年では上記に加え、認知機能の向上を目的としたさまざまな多重課題の運動プログラムが推奨され始めている。

本研究部会の活動内容は、地域の人々が健康を維持するために「ふまねっと運動」を取り入れた。「ふまねっと運動」とは、マス目を利用した多重課題の運動プログラムであり、歩行や認知機能の改善を目指した運動である。2014年に引き続き、名東福祉会館・北一社コミュニティーセンター（名東区社会福祉協議会主催）において、健康教室（「ふまねっと運動」）を定期的に実施している（演習所属の学生数名もボランティアで参加）。

2015年9月には、ワンツースリーの理事長（北海道教育大学の北澤一利教授）を招いて、講習会を実施した。参加者は名古屋市名東区を中心とした地域住民及び社会福祉関係の方々であった。さらに、10月にはサポーター養成講習会を本学で開催した（本学学生も参加した）。

研究活動としては、健康教室参加者に対して「ふまねっと運動」の運動効果、心身の健康、食生活と健康などについて2014年に実施した実態調査をまとめた。研究テーマは、①地域在住高齢者に対する軽運動プログラムを試みて（中野匡隆）、②地域の高齢者が軽運動をすることによる心身への影響（澤田節子）、③地域の高齢者が集団で軽運動をすることによる心理的変化（肥田幸子）、④軽運動教室に参加した高齢者の食生活や健康に関する意識調査（尚爾華）、であった。

調査結果をみると、実践した運動プログラムについては、「人と人とのつながり」や「人と人との交流」あるいは「信頼関係」といったソーシャルキャピタルの考え方が重要であることがみえてきた。

心身への影響についての調査では、①網を踏まないようによく視て歩く（注意力・集中力）こと。②ステップや手拍子などの学習（記憶力）をすること。③歌や数字などを想起し、言葉を発すること。④ステップのルールに従い、リズムに合わせる（リズム感・聴力）ことなどの内容が抽出された。このように「ふまねっと運動」が目指している運動効果が確認できた。

心理面の調査では、「ふまねっと運動」は、運動の好き嫌いや運動習慣、対人関係、社会活動の満足感などとは関係なく、どの人が実施しても効果に結びつき、一過性の心理面の効果が出ており、疲労感因子と心理的ストレス因子は有意に低減していた。

食生活調査に関しては、食事の時間を決めて、食事を楽しみ、味わって食べていて、概ね良好な結果であった。しかし、食事を一人でする（時々を含む）と回答したものが8割弱であり、独居高齢者の増加が原因であると考えられる。高齢者の健康づくりにおいては、日々の暮らしのなかで、楽しく食事ができ、食べることも生きがいに繋がっていくような多方面からの支援により、新型の栄養失調を未然に防ぐような対策も重要となるであろう。

しかしながら、保健行動のうち食生活や運動の生活実態では、知識として理解できても実践が伴わないのが現実であるため、いかに習慣化し実践に結びつけていくかが課題であると思われる。また、参加者には各種の運動測定などを試みたが、有意な差は出ていなく、今後の課題である。

「ふまねっと運動」は、体力の向上を目標とした激しい運動ではなく、仲間とともに楽しくできる軽運動である。この軽運動を通して、人々が自主的に社会参加でき「人との交流」が増え、この地域に健康づくりの輪が拡がることを期待したい。

（図．健康教室でのウォーミングアップ）

講演会・シンポジウム

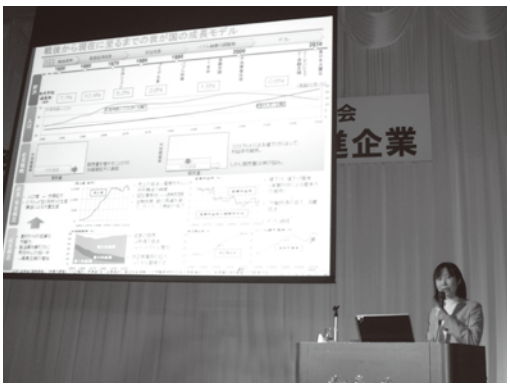
多様性を活かす「女性活躍」で企業業績が向上

地域創造研究所 所長
山極完治

地域創造研究所が主催する「多様性を活かす女性活躍推進企業」をテーマにした講演とシンポジウムが、名古屋市中区のホテル名古屋ガーデンパレスで開催された。東邦学園の支援組織であるフレンズ・TOHO会員はじめとする企業経営者や地域創造研究所所員、経営学部の学生に加え、県職幹部や愛知県で女性活躍を推進しているWoomax取締役など約120人が参加した。

2011年6月から3年間、安倍政権などで経済産業省経済産業政策局社会政策室において女性活躍・ダイバーシティ経営を担当した坂本里和さんが基調講演をした。

坂本さんは、女性の役員・管理職登用と男女共にWLBの実現とを同時に取り組んでいる企業は、ROE（株主利益率）、TFP（全要素生産性）はじめ各種の指標で企業業績や生産性が向上していると指摘した。企業に多様性を取り込むことで成長に繋がる女性活躍は、「単なる福利厚生と捉えるのではなく、経営戦略として取り入れてほしい」と話した。



坂本さんは、女性活躍推進の経営効果を踏まえ、女性、高齢者、外国人、障がい者、多様なキャリア等、多様な人材の能力を最大限発揮されることにより、イノベーションの創出、生産性の向上等の成果を上げている企業を「ダイバーシティ経営企業100選」として選定・表彰する取組みを主導している。また、「女性活躍推進」に優れた企業を優良銘柄とした「なでしこ銘柄」も開発している。

これらの取組みをしてきた体験に基づき、大企業、中小企業を問わず、日本企業におけるダイバーシティ経営による成果事例を20社、具体的に紹介された。

引き続き、坂本さんの基調講演を踏まえ、wiwiw（ウィウィ）社長で昭和女子大学客員教授の山極清子さんとラッシュ・インターナショナル代表取締役の倉田満美子さん、二人の女性経営者が加わったシンポジウムが行なわれた。コーディネーターは経営学部の小柳津久美子准教授が務めた。2人のシンポジストは、女性経営者としての自らの体験を踏まえ、女性活躍が企業業績を引き上げているとする事例を具体的に紹介している。女性活躍を可能にする登用政策・施策やWLBの運用の仕方など本音トークもあり、活発な議論がなされた。

「女性活躍」は、愛知県下の企業にとっても成長戦略といえるものであり、規模を問わず中心的課題と位置づけられる取組みである。2016年4月から女性活躍推進法による女性活躍行動計画の策定が急がれている。

「タイムリー。Goodです。」「非情に興味深いテーマです。福利厚生ではなく、業績向上の為の女性活用の観点が共感しました。」「女性が活躍できるダイバーシティ経営企業は、とても見本になる企業だということを気づかされました。また、山極様、倉田様の会社は、登用から考えられていることが素晴らしい経営戦略だと感じました。」「女性活躍に対して、非常に関心のあるものを聴くことができ、良かったと思います。私も、今後の日本の成長のカギは、女性が活躍することにあると思います。」そして「女性活躍について考えさせられたし、すごく参考になりました。日常業務に早速活かしていきたい。」といった講演会・シンポを評価して下さった参加者の声が多く寄せられた。

女性活躍が企業業績を向上させるとする講演会・シンポは、東海地域の私立大学ではじめての試みであった。広く東海圏にある企業が抱えている今日的課題に応えた取組みとなった、講演会・シンポは有意義なものといえるのではないだろうか。

『地球のステージⅣ ―果てなき地平線―』

人間学部教授
宗貞秀紀

■音楽と映像を組み合わせた公演会

去る11月28日（土）本学B101号室にて標題の第4回目の公演会を開催しました。このステージは、1回から6回迄がシリーズとなっている公演会で、内容がそれぞれ異なっています。公演会にもいろいろ有りますが、著名人の語りでもなく，映画だけでもなく、歌手の発表会でもない。いわゆる「動画・写真・音楽・演奏・弾き語り」を組み合わせた、新しい公演ステージの組み立てとなっています。一人の医師の国際支援（震災復興支援・紛争後の子ども達の支援、貧困地域の医療支援等々）の活動ですが、まとめて整理したものを巧みに語り我々に伝えてくれる公演会です。

第1回のステージが1996年1月15日より始まったライブ的ステージは、口コミで全国の学校、PTA、人権委員会、生涯学習課、地域医療活動団体等々に拡充し、近年は年間250回におよぶ公演会ステージが行われて来ています。既に今年度で3,300回の公演会を通過し、この非営利な「コンサートステージ」は、全国津々浦々に出かけて開催されています。

演者は、宮城県名取市で精神科医を務めながら、NPO法人地球のステージ代表の桑山紀彦さんです。

あの3.11。東日本大震災に遭遇され、あれから4年と10ヶ月が過ぎ去りました。今は，二度目の大きな心の傷に遭遇されています。特に、名取市閖上地区は家屋が全壊し、900人の人々の命が奪われ壊滅的な被害を受けました。現在は，更地となった閖上地域も、半壊の建物の解体と大地のかさ上げ作業開始が現在の姿です。復興のために喜んでよいのか，家族と住んでいた跡地が消え去ろうとしているとき、住民の多くは二度目の心の傷が刻まれようとしている時期の開催となりました。

本学の山極完治地域創造研究所長より開演の挨拶を終え、息を切らしたような静寂の中で、ステージのダウンライトによりゆっくりスタート致しました。

■オープニングは応援歌

「地球のステージ」公演会で全国津々浦々を移動して廻る様子が動画で映され、新幹線、車、飛行機とさまざま乗り物を乗り継いで公演会場に出かけ、多くの人々と出会う姿が「応援歌」の歌に合わせた紹介動画から始まりました。

■「赤ちゃんは泣くのが仕事です」

会場が暗転の中でスタートです。会場に親子連れで参加されていた、赤ちゃんが「オギャー、オギャー」と元気で大きな鳴き声が会場全体を包み込みました。スタート曲の応援歌が終わった途端、桑山さんからは、開口一番。「この地球のステージは、幼児ら高齢者までいろいろな方々に来ていただいています。今日も、公演会を応援するように、赤ちゃんが会場で元気よく泣いておられました。赤ちゃんは泣くのが仕事で、大きくなるには大切な行為です。私も会場の皆さんも嫌ではありませんので、お母さんも会場を後にすることがないように、最後まで鑑賞してくださいね」。と、赤ちゃん同伴のお母さんに気を使っておられました。「こんな会場に赤ちゃんを連れて来るなんて」。「うるさいな」とよく叫ばれる時世の中で、会場全体が「心地よい人間の温かみ」に触れた思いでした。

■国際協力篇

青年海外協力隊員（JICA）としてアフリカのガーナ国を踏み、自分の人生をかけてガーナにかかわり続けようとするある青年の生き方に焦点をあてた紹介動画です。一つの生き方を貫き通す青年の信念に、人間の底力を感じました。ガーナで支援活動をしながら、東北震災の時は、日本のふるさ支援にも参加されていることも紹介されました。見て見ぬ振りができない。ほっては置けない青年の心意気が感動的でした。

■パレスチナ・ガザ地区での活動篇

パレスチナ自治区のガザ地域の近くにラファという地域が有りますが、そこでの活動の紹介です。子どもの心のケアについてですが、紛争や親、友達との死に別れで傷ついた心から立ち直る取り組みです。その方法として、子どもたちが、ふしぎな石を五つ拾い集めて、その石が一つに重なった時に、亡くなった人からのメッセージが聞こえてくるというものです。その声を聞いた少女たちは、その声のメッセージから生きる勇気を授かる内容です。パレスチナで取り組む以前には、日本の桑山さんの住む、被災地でもある名取市・閖上の子どもたちとも取り組んだ実績から、ガザ地区での取り組みとなっていることが紹介されました。

■ヒロシマ篇

ステージ展開に共通するあらすじは、「命」「つなぐ」でした。戦後70年経過した被爆地ヒロシマですが、被爆前の広島県産業奨励館、そして、被爆後の産業奨励館（原爆ドーム）の姿が映し出されました。原爆資料館などで、証言者として当時のことを語り続ける人が紹介され、戦後生まれの若い人々へ語り繋がれるヒロシマの今の姿が被爆写真などと紹介されました。「人は忘れてしまう生きもの、だからこそ続けていける平和教育」。広島市内のある中学校の継続した平和教育の取り組みが映り出されました。

■命をたどる旅路篇～

遠い昔、開拓のために飛騨高山から北海道に渡ったといわれる桑山さんの祖先（ルーツ）を辿った旅路篇でした。北海道で目にした電話帳。「桑山」の名字からたどりにたどった「つながり」の話が、見事、探し当てて「親戚一同が再会の集い」となった話でした。映像では、そのルーツ探しと、実父親との死別による別れが紹介され、「命とつながり」がテーマのステージ4は見事に重なり、エンディング曲の「この指とまれ」のバイオリン・ギターによる演奏歌とマッチして静かに終演しました。

ステージ公演終了後は、階段までの会場あふれる参加人数（192人）は、山極所長のコーディネートのもとで、演者の桑山さんと参加者との質疑応答や初めて参加された方からの感想が出され熱心な交流が行われました。

書籍紹介　『地域創造研究所の近著2冊』

地域創造研究叢書 No.23

東日本大震災被災者体験記

（唯学書房 2015.3.11）

本書は、既刊『叢書19 東日本大震災被災者支援活動』に続く東日本大震災関連記録集である。第1部津波被害のその後、第2部気仙沼の人たちの「当日」と「被災直後」の2部構成で、第1部は中学校の防災担当教員の被災後の教育体験と、宮城県下の膨大な被災廃車の処理を担った解体業者の体験談。第2部は、本学の旧教員が被災1か月後から1年近くにわたって現地で聞き取り調査を重ねた記録のうち、被災直後の気仙沼市に関する記録を整理したものである。気仙沼の部をまとめたのは、伊勢湾に面した愛知県や三重県で予想される災害と重なる部分が多かったからである。東日本大震災被災地は、地震よりも津波と福島原発事故の影響が大きかったが、本書ではそのうち「津波被害」について取り上げている。突然家を失った人たちが、発災当日どのような状況であったか、被災直後にはどういう行動をとったか、落ち着くとともに何が問題になったのか、東海地方でも役立つ情報であろう。

地域創造研究叢書 No.24

スポーツツーリズムの可能性を探る
―新しい生涯スポーツ社会への実現に向けて

（唯学書房 2015.11.30）

本書は、わが国におけるスポーツツーリズムの可能性を探ることを目的に、とりわけ生涯スポーツの視点からスポーツツーリズムを捉え、それをどのように推進していくことが新しい生涯スポーツ社会への実現につながるかということについて著したものである。内容は、第１章 わが国における観光立国実現への取り組み（藤森 憲司）、第２章 スポーツツーリズムを推進する地域の取り組み（杉谷正次）、第３章 生涯スポーツとしてのスポーツツーリズムの可能性を探る ―グラウンド・ゴルフによるスポーツツーリズム（青木 葵）、パークゴルフによるスポーツツーリズム、卓球によるスポーツツーズム、少子超高齢社会における生涯スポーツ社会実現への取り組み（石川 幸生）、第４章 スポーツツーリズムとヘルスツーリズム（葛原 憲治）である。

寄稿　地域生活に必要な四つの人間関係

人間学部教授
宗貞秀紀

地域で生活する我々の人間関係や近隣地域社会は、高度情報化の進展に逆比例して「希薄化」が進んでいる。人口高齢化と少子化、不登校も重ね合わせて「在宅引きこもり」の人口も増大している。健全な在宅生活が可能で地域生活が希望にあふれた活き活き生活ならば問題はない。社会の介護保険制度や民間サービスを有効活用すれば安心して生きて行けるとは限らない。

生活には四つの人間関係が必須であると言われている。一つは、情緒的人間関係である。喜びや悲しみを共有できる人が側に・近隣に存在しているかである。聞いてくれる人や共感し合える人のことである。二つ目は、手段的人間関係である。自分で出来ない時に電球の交換、植木の水かけ、ゴミの分別やゴミ出しのちょっとした手伝いをしてくれる人がいるかどうかである。三つ目は、評価的人間関係である。自分が地域社会で存在を評価されているか、声をかけ合える関係かどうかである。四つ目は、情報的人間関係である。目、耳も不自由になると新聞、テレビ、ラジオを見たり聞いたりが不自由となる。街の拡声器放送も聞こえない。そんな時、「資源ごみの回収日が何日に変更となりましたよ」などと伝えてくれる人が存在するかどうかである。

「人は、ひとりでは生きていけない生きものである」。は、この四つの機能が家族や近隣者で存在がないと孤立して、生きがいを喪失すると言われる。

幼児期、青少年期を含めて成人、高齢者の誰もが必要とされる。「側に求められる人間関係」である。

「そんなことはない。健康だから、自分でできるから、自立しているから人に頼ら無いで生きていける」。と強気を言っても無理であるとJ.S.ハウスの社会学者は指摘している。

孤独と孤立は似ていて意味が全くことなる。高度情報化に囲まれただけでは地域の安心生活は不可能といえる。現代の地域社会では、四つの働きが可能となる人間関係やサポートシステムが叫ばれている。日常の地域の人間関係を振り返ってみたいものだ。

地域の話題

すすむ東邦　地域連携事業

経営学部准教授
小柳津久美子

「楽しかった～」「もっとやりたい！」子ども達の元気な声が体育館に響く中、2015年8月11日に「平和が丘学区子ども会ドッヂボール大会」が行われました。当日は体育館での開催とはいえ、季節柄、熱中症が心配されましたが、参加児童51名、保護者・幼児32名にトラブルなく楽しんでいただくことができました。

この大会は、「東邦プロジェクト」という地域と連携したプロジェクト活動を行う科目で実施しました。企画から実行までの全てを経営学部2年生5名が学区の会長さん役員さん、子ども会役員の皆さんにご協力をいただき開催したものです。

企画段階では学生の考えと子ども会の考えが異なり、その刷りあわせから始まりました。参加する小学生がどのような内容にしたら楽しんでもらえるか企画の練り直し、シミュレーションを繰り返しながら当日に備えました。まだまだ未熟ではありますが、学生たちは相手の気持ちや立場を想像し、それにあったものを創造する手法や考え方を学んでくれたと思います。

また、平和が丘学区夏祭りにおいても今年度は吹奏楽部の演奏参加、昨年度は夜店の出店、2年続けて女子サッカー部による盆踊りへの参加、そして残念ながら雨で中止にはなりましたが大学祭と地域の秋祭りとのコラボレーション企画等、平和が丘学区との関わりを深めています。

それ以外にも、ゼミ活動、クラブ活動、学部での活動や教職員による活動など様々な形で地域の方々との連携活動、加えて従来から行っている地域創造研究所からの研究成果の発信を行っておりその活動は非常に多岐に渡ります。

その様な中、今年度から「地域連携センター」も立ち上がりました。初年度ということで、まだ構想中の部分も多いのですが、大学を身近に感じ、何かあれば「あの大学に相談してもみよう。」と思っていただけるような活動を拡大していくことで、大学と地域の皆様がWin-Winの関係の中、「地縁/知縁関係」を結んでいくことができればよいと考えています。

地域創造研究所　2015年度の主な活動

2015年 6月 2日	第44回研究会『学生の「力」をのばす大学教育―その試みと葛藤』刊行記念報告 （企画：人材育成研究部会　報告：手嶋慎介氏、大勝志津穂氏）
2015年 6月 2日	地域創造研究所第15回総会
2015年11月28日	第15回講演会（公演会） 「地球のステージ4～果てなき地平線～」（於：愛知東邦大学）
2015年11月30日	研究所叢書No.24 『スポーツツーリズムの可能性を探る―新しい生涯スポーツ社会への実現に向けて』刊行
2016年 1月30日	講演会「多様性を活かす女性活躍推進企業」 後援：愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、名東区役所 （於：ホテル名古屋ガーデンパレス）
2016年 3月10日	研究所所報No.21発行
2016年 3月31日	研究所叢書No.25『ことばでつなぐ子どもの世界』刊行

※その他、各研究部会主催による研究会等多数

学校法人　東邦学園
愛知東邦大学　経営学部　人間学部　教育学部
東邦高等学校　普通科・商業科・美術科

所報 NO.21　2016年3月10日
発行・編集　愛知東邦大学地域創造研究所
〒465-8515
名古屋市名東区平和が丘三丁目11番地
TEL (052) 782-1241　FAX (052) 781-0931
URL http://www.aichi-toho.ac.jp
E-mail kenkyujo@aichi-toho.ac.jp